

令和4年11月の現況と12月の対策（果樹）

10月の実況（11月実況は次月掲載）

10月は日照時間が171.0時間で平年（154.4時間）比111%とやや多かった。降雨日数は9日で平年（13.2日）より少なく、月の降水量は143.0mmで平年比93%とやや少なかった。真夏日は4日に30.4℃が記録されたのみであった。一方、日最低気温10℃以下となった日は9回記録され、最低気温極値は6.3℃（26日）であった。10月の平均気温は16.8℃であり、平年比0.3℃とやや低かった。最大瞬間風速15m/s以上の強風が記録された日は2回あり、5日の15.4m/sが最も強かった。

[以上、福井地方気象台の観測データに基づく]

1 ウメ

(1) 生育状況（園芸研究センター）

11月下旬から本格的に落葉が始まり、11月21日現在、「紅サシ」で60%程度落葉している。

11月24日調査「紅サシ」の短果枝花芽密度（暫定値）は2.00個/cm（平年1.76個/cm）であり、平年より高い。

(2) 地域状況

11月末現在、各地でせん定作業が進められている。

ウメ花枝は12月3日から計6回の集荷で約60万本の出荷が計画されている。

2 ナシ

(1) 生育状況（農業試験場）

11月22日現在、「幸水」はほぼ落葉し、「豊水」は6割程度落葉した。

(2) 地域状況

落葉は、平年並みに進んでいる。

粗せん定が終了し、本せん定が始まっている。

3 カキ

(1) 生育状況（農業試験場）

「刀根早生」は10月5日から収穫を始め、前年より4日早い10月16日に終了した。平年に比べ大玉で、糖度は同程度であった。

「平核無」は10月26日から収穫を始め、前年より8日早い11月7日に終了した。平年に比べ大玉で、糖度は同程度であった（表1）。

表1 カキの生育と果実品質

品種	年次	発芽期	開花期(月/日)			収穫期		平均果重 (g)	糖度 (%)
			始期	盛期	終期	始期	終期		
刀根早生	2022	3/25	5/18	5/20	5/22	10/5	10/16	287	15.8
	2021	3/20	5/17	5/19	5/21	10/4	10/20	287	15.8
	2020	3/20	5/22	5/24	5/26	10/14	10/21	273	15.9
	2019	3/23	5/18	5/20	5/22	10/16	10/23	254	16.0
	2018	3/26	5/16	5/18	5/21	10/1	10/17	282	15.0
	平年	3/26	5/18	5/20	5/23	10/7	10/21	264	16.0
平核無	2022	3/25	5/18	5/20	5/22	10/26	11/7	286	16.3
	2021	3/20	5/17	5/19	5/21	10/29	11/15	272	16.0
	2020	3/20	5/22	5/24	5/26	11/4	11/11	282	16.6
	2019	3/23	5/18	5/20	5/22	10/30	11/11	265	15.4
	2018	3/27	5/16	5/18	5/21	10/22	11/12	295	17.4
	平年	3/27	5/19	5/20	5/23	10/28	11/12	277	16.4

(2) 地域状況

あわら市の「平核無」は11月6日に集荷が終了した。収穫量は平年よりやや多く、台風による傷果や汚損果が目立った。あんぼ柿、干し柿の生産が本格的に行われている。落葉は、平年並みに進んでいる。

4 イチジク

(1) 地域状況

若狭管内の集荷は、11月下旬まで継続する予定である。

対 策

各樹種共通

1 苗木の植付け

樹種によって苗木の植付け適期は異なる。

多くの落葉果樹では、雪解け後になると根の伸長が始まり、活着不良により枯死することもあるので、できるだけ休眠の深い年内に植付けを完了する。

植付けは、晴天が続いた後で、土壤水分が少ない状態で作業を行う。前月の情報に従って植え穴を準備し、根が露出しないよう5cm程度の覆土を行うが、接ぎ木部が土の中にかくれてしまわないように注意する。植付け後は、凍害や野ウサギの害を防ぐために、稲わらなどで苗木を覆う。

年内に植え付けできなかった落葉果樹、またはミカン等の常緑果樹で年内に苗木を入手した場合は、結束されている束のまま、砂壤土などで排水良好な場所に仮植えする。覆土後に十分量のかん水を行った上で、地上部全体にワラや寒冷紗などを巻き付け、寒風による落葉や野生動物の食害を防ぎながら越冬させる。融雪後は3月末までに遅れることなく植付けを行う。

2 基肥の施用

11月下旬から基肥の施用時期に入っている。まだ施用していない園地では12月上旬までに施す。地域・樹種ごとの施肥指針に基づき施用する。

3 整枝せん定

落葉果樹でせん定せずに降雪期を迎えると、積雪や着雪によって枝折れが発生しやすくなるので、本格的な降雪シーズン前にせん定作業を進める。特に、ナシ・ブドウ・キウイフルーツなどの棚栽培果樹では、着雪による棚の倒壊を防ぐため、年内に粗せん定を済ませる。

ミカン等の常緑果樹では、冬期間の落葉を防ぐため、ムシロや寒冷紗等で樹冠全体に防寒被覆を行い、融雪後(3月頃)の温暖な日にせん定を行う。特に若木は凍害を受けやすいため、株元を中心に主幹部にも被覆を行う。

樹種別に特に注意すべき事項は以下のとおりである。

(1) ウメ

地域・園・樹や栽培管理によって花芽のつき具合や結果枝数は異なるので、せん定前に花芽のつき具合や樹勢(新梢の伸び・太さ・数など)をよく観察する。

「紅サシ」では、直射日光が当たるような側枝は樹脂障害果の発生が多いので、立ち枝側枝よりも骨格枝に近い部位から発生した緑枝(弱勢な発育枝)を積極的に残し、2~3作程度利用可能な側枝として活用する。

「新平太夫」や「福太夫」は樹勢が強いため、骨格枝の上面に発生した新梢を残すと翌年に徒長枝が発生して良好な側枝を得られないことが多い。骨格枝の側面から発生した弱勢な新梢(目安:基部まで緑色で長さ30~50cm程度)を残して側枝に養成する。

(2) ナシ

樹冠の拡大に伴い、密植状態になっている園では縮・間伐を計画的に行う。

成木のせん定は、100~150cm前後の長さの側枝を40cm間隔でまんべんなく配置できるように、主枝および垂主枝(1主枝当たり2~3本)を配置する。3~4年以上経過して、花芽が少なくなった古い側

枝は更新して若返りを図る。主枝、亜主枝は真っ直ぐ養成し、先端部は他の部位よりも30~40cm程度高くなるように立ち上がり部を設ける。

(3) カキ

樹齢が10年を超えた頃から隣接樹と枝が交差して過密状態になってくるので、縮・間伐を実施する。

永久樹については作業しやすい樹形にするため、主枝先端部は立ててやや強めに切り返す。亜主枝は1主枝当たり2本程度にする。長大化した側枝は整理し、新梢の発生を促して、側枝をまんべんなく配置する。

4 雪害防止対策（露地）

(1) 降雪前

各樹種とも粗せん定を急ぐ。

混みあっている部分は、着雪を少なくするため、不要な枝や徒長枝の間引きせん定を実施する。

ナシなどの棚栽培では中支柱を入れるなど棚の補強対策を行う。支線がゆるんで棚が低くなっている場合は、棚締めを行う。吊棚は、積雪による加重が棚に均等にかからない場合があり、少ない雪でもバランスを崩して倒壊する危険性があり注意する。

幼木は結束して樹冠を縮めるか、幹に添わせて支柱を立て、支柱の先端から枝を吊り上げる(図1)。成木では、主枝等の主要な枝に下からタル木などの支えをあてがい、骨格枝の折損を防止する。

(2) 降雪中・降雪直後

降雪中や降雪後は園内を見回り、枝に付着した雪を払い落とし踏圧する。

雪に埋まった樹や枝は放っておくと雪の沈降で裂開する。多量の降雪があったら、融雪が進まないうちにすみやかに雪中から枝を掘り出し、タル木などのつかい棒をあてがい、枝を持ち上げる。

幼木が積雪によって傾いた場合は、早急に引き起こし、支柱を添えて固定する。

枝折れや枝裂けした場合は、被害が軽い時はヒモや縄等で緊縛して枝の接合をはかる。大きく裂開して枝の接合が困難な場合は切り戻しを行い、ゆ合剤を塗布する。

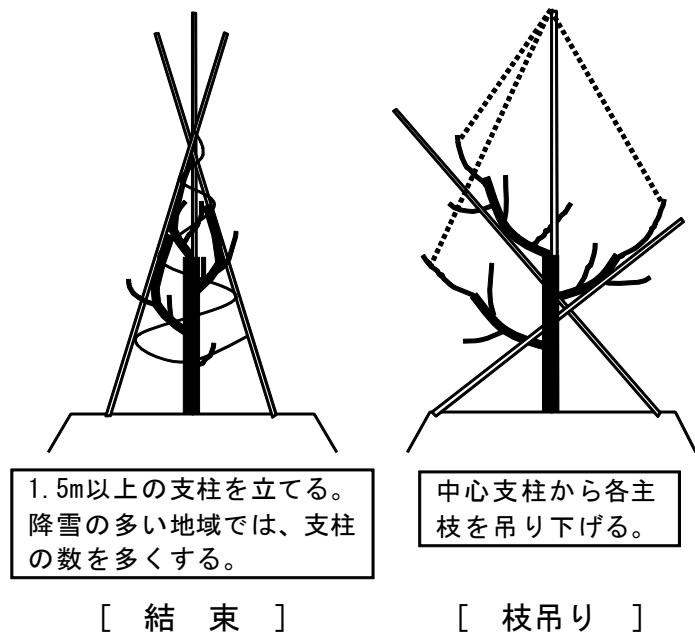


図1 幼木の積雪対策

5 雪害防止対策（ハウス等施設）

(1) 被覆ビニールの除去

- ・耐雪型でないハウスは、積雪前にすみやかにビニールをはずしておく。
- ・天井ビニールをアーチ最上部へ巻き上げる構造の場合には、左右から巻き上げた2本のビニー

ル上を別のビニールで被覆し、アーチ最上部への積雪を防ぐ。

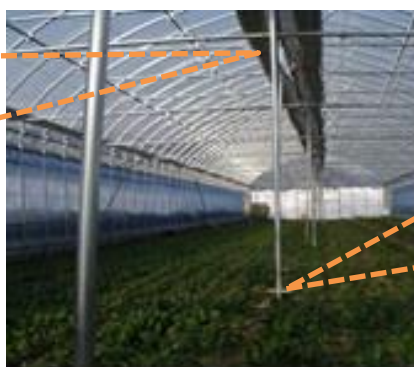
(2) 降雪前の対策

ア パイプハウスの補強・補修

- ・中柱は、3～4 m間隔で設置する。

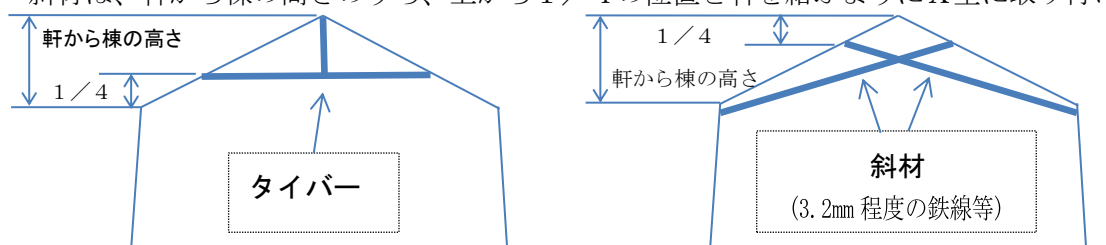


T字金具で固定



ジャッキ付き台で調整
ブロックや厚板で沈込み防止

- ・タイバーは、軒から棟の高さのうち、軒から1/4の位置に取り付ける。
- ・斜材は、軒から棟の高さのうち、上から1/4の位置と軒を結ぶようにX型に取り付ける。



- ・基礎部が腐食している場合は、パイプの交換や補強資材により強化を図る。
- ・ハウスの保温性向上を図るため、ビニールの破れや隙間の点検、補修を行う。

イ 融雪・除雪の準備

- ・暖房装置や融雪設備がある場合は、燃油残量、装置の動作を確認する。
- ・ハウス側面に積もった雪を融かすために、肩面に融雪装置を設置する。
- ・融雪効果を高めるために、ハウス横に幅1 m程度の浅い融雪溝を整備する。
- ・除雪機を使用する場合は、ハウス周囲の障害物を取り除いておく。

(3) 降雪時の対策

ア 融雪

- ・暖房装置がある場合は、内張りカーテンを開放した上で暖房を行い、屋根雪を滑り落ちやすくする。
- ・暖房装置のないハウスでは、内部を密閉して気密性を高めることで、地熱により室温を上昇させ、内張りカーテンを開放して屋根雪を滑り落ちやすくする。
- ・散水による融雪では、ハウス側面に積もった雪に散水する。
- ・ビニールの弛んだ部分や天窗に積雪した場合は、早めに人力で除雪する。
- ・積雪が多く危険と判断される場合はハウスに入らない。

(4) 積雪後の対策

ア ハウスの除雪

- ・除雪の順番は、①ハウスの肩部、②屋根部、③サイド部の順で行う。
- ・屋根部まで積雪した場合は、重みが片寄らないようハウス両側を均等に除雪する。

イ 着雪防止・沈降圧防止

- ・ビニールを除去してあるパイプハウスでも、積雪による沈降圧で変形、破損等の原因になるので、パイプ部を早めに掘り出しておく。